

<第 175 回> 平成 26 年 1 月 14 日 (火)

防災教育講演会を振り返る

12月20日(金)に、宮城県気仙沼高校から佐藤忠司先生(進路指導部長)をお招きし、「学校防災力の向上をめざしてすべきこと ～東日本大震災における気仙沼高校の取組みを踏まえて～」をテーマとした防災教育講演会を実施しました。当日は、全校生徒(1,065人)、教職員の他、希望保護者や他の県立高校、神奈川県教育委員会情報防災課、茅ヶ崎市防災対策課、「ひらつか防災まちづくりの会」の皆様が、会場の体育館に集まりました。

最初に東日本大震災で被災した方々に黙祷(もくとう)を捧げた後に、講師の佐藤忠司先生をご紹介し、講演に入りました。映像を交え、ていねいに心を込めての話に、生徒たちは聞き入り、ほとんど初めて聞く内容にびっくりしていました。椅子にきちんと座り、最後まで真剣であった様子から、防災意識の向上に役立つ講演会であったと感じとることができました。



佐藤忠司先生



生徒も乗っていた JR 気仙沼線の様子

① 佐藤忠司先生による講演の主な内容

- ・生きていていいな、ということをお伝えします。
- ・私も親戚4人と同級生を失いました。被災した1人です。
- ・皆さんは校門に掲示してある茅ヶ崎西浜高校の標高を見たでしょうか？まず、自分がいるところの標高は何メートルなのか、川のそばなのか、海のそばなのか、よく考えて行動してください。
- ・気仙沼湾の気仙沼向洋高校は津波の被害を受けましたが、生徒は全員無事に高台に逃げました。気仙沼高校は標高が20メートルあるので、津波による校舎の被害はありませんでしたが、地震による破損がありました。震災前、生徒には10メートルの津波が来たら気仙沼の市内は大変なことになると言っていました。
- ・大震災のあった3月には、雪の中を、10万人規模の自衛隊が、必死に行方不明

者の搜索活動を続けてくれました。現在もまだ見つかっていない人もいます。

- ・気仙沼高校の生徒の家の被災状況ですが、「被災なし」が 59%、「居住可」10%、「半壊」が 31%です。家族が被災した生徒は 3 年生が 14 人、2 年生が 19 人、1 年生が 11 人になっています。[※] 宮城県の高校生では、生徒 90 人、職員 2 人が亡くなりました。不明も 8 人います。被害額は 271 億円。入学式も卒業式も、例年のようにはできませんでした。

※気仙沼高校の被災状況の数値は、平成 23 年 3 月 11 日時点のものです。

- ・気仙沼高校が学校としての機能を回復したのは 5 月 9 日でした。
- ・教訓としては、まず的確な指示を出すことです。放送が機能しない場合には、的確な情報収集と伝達手段が重要です。コミュニケーション能力が必要です。生徒に言っているのは、ラインやツイッターを今は使えているが、携帯が通じない場合にどうするか。身分証明になるので、携帯電話を落とさないこと。安全な場所を確認し、家族との集合場所などを決めておくことも大切です。
- ・持ち出す余裕がなく、必要な物資がないこともある。学校では、避難集合場所に食糧や飲料水だけでなく、生徒の名票や発電機などを準備しておく必要がある。備蓄倉庫が水没して毛布などが使えない場合もある。
- ・様々な情報が錯綜した。実際に、高校に避難してくる方々への対応に追われ、生徒を保護者へ引き渡す際にも、混乱があった。
- ・避難所（体育館）では、ホワイトボードやメモが有効であった。深夜まで続く避難者の対応を、気仙沼高校では運動部の生徒たちが行ってくれた。体育館には寒さ対策で、新聞紙を敷いた。避難住民の誘導は市と連携した。やってくる何百人もの避難者を、ブロックごとにリーダーを立て、統率を図った。安否確認は大変なので、安否を知らせる手立てを工夫し、検討する必要がある。
- ・絶対に生き抜かなければならない。自分の父母、幼い子どもたちを誘導するのは皆さんである。そのためにも、東日本大震災を風化させてはならない。
- ・苦しいときに「想定外」などというが、これは言い訳になる。自分は一人ではない。未来は予測するものではなく、つくるものである。



集合場所を決めておくことが大事



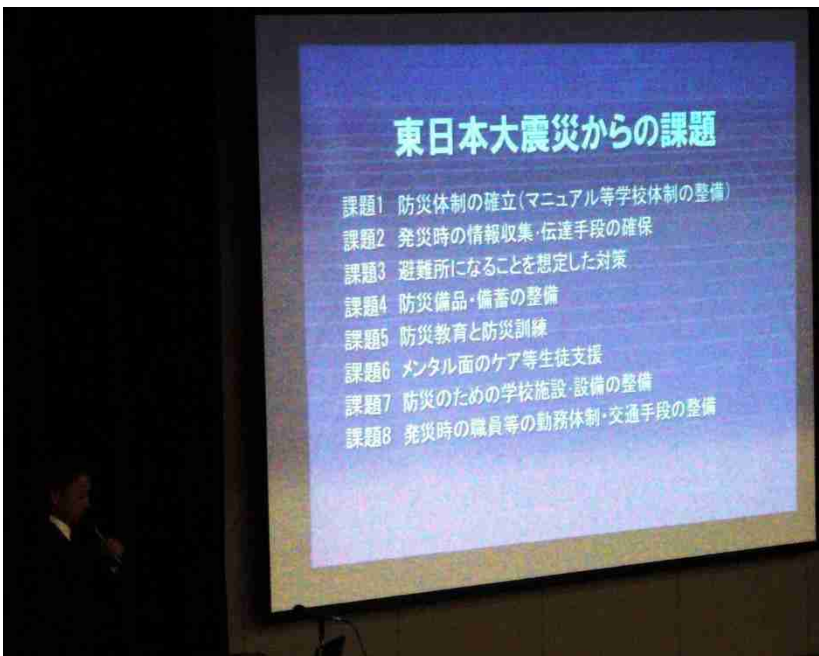
宮城県内の津波の状況



1 学年 10 クラス
 2 学年 9 クラス
 3 学年 8 クラス
 合計 27 クラス 1,065 人の生徒
 に教職員、希望保護者、その他
 の参加者。
 これだけの数の椅子を並べて、講演
 会を実施したのは初めてでした。

最後まで真剣に聴いていた生徒の
 姿が強く印象に残っています。

東日本大震災からの課題



- 1 防災体制の確立
(マニュアル等学校体制の整備)
- 2 発災時の情報収集・伝達手段の
確保
- 3 避難所になることを想定した
対策
- 4 防災備品・備蓄の整備
- 5 防災教育と防災訓練
- 6 メンタル面のケア等生徒支援
- 7 防災のための学校施設・設備の
整備
- 8 発災時の職員等の勤務体制・交通
手段の整備

② 講演会後の生徒アンケートから ※一部を紹介

1 具体的に印象に残ったこと、改めて理解したことは何ですか

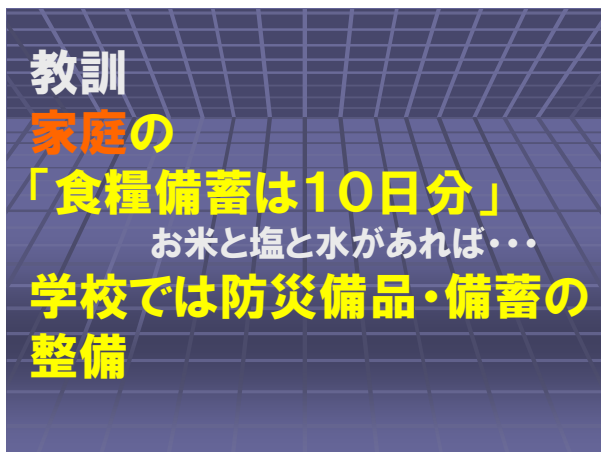
- ・映像で津波の恐ろしさが分かった、衝撃的だった。
- ・災害時の心構えが分かった。
- ・被災者の気持ちを踏みにじってはいけない。
- ・忘れかけていた時期なので良かった。
- ・自宅が海のそばなので怖い。
- ・津波がめちゃ速いんだと思った。
- ・「逃げて！」と叫んでいる場面。
- ・命を守るということを深く考えさせられた。
- ・二次的な被害も恐ろしいと思った。



- ・映像は見ていてつらかった。
- ・周辺の標高を知り、逃げる場所を常に考えるべき。
- ・危機感が薄れていて、映像で深く考えさせられた。
- ・人生が変わってしまうことがよく分かりました。

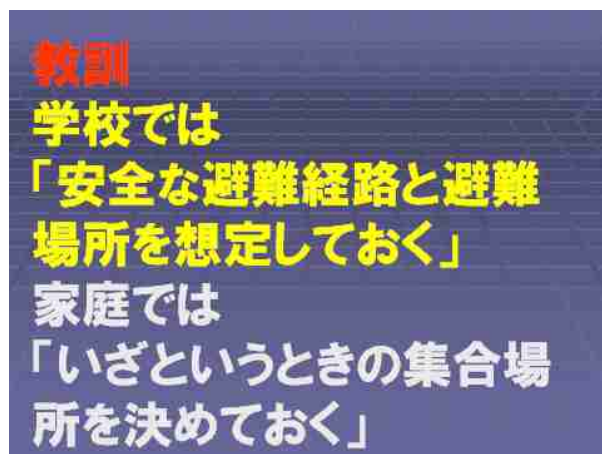
2 現在、防災に関して何か心がけていることがありますか

- ・地下鉄に乗るときは、イヤホンをしない。
- ・いつも携帯の充電器を持参している。
- ・家族で避難場所を決めている。
- ・もっと真剣に取り組まなければならないと思う。
- ・玄関に防災グッズがある。
- ・防災リュックを用意している。
- ・枕元に懐中電灯を置いている。
- ・近隣の人との日常からの交流を心がけている。
- ・登下校時は、津波を想定している。
- ・出かけるときの行先や居場所を家族に伝える。



3 今後、防災活動において心がけること、全体を通じての感想など

- ・ブレーカーを落として逃げる。
- ・防災訓練を十分にすべき。
- ・どのように逃げるかというシミュレーションが大切。
- ・家族で話し合うべき。
- ・氏名や身分を示すものを持参すべき。
- ・水・食料を確保する。
- ・連絡をどうするか。
- ・落ち着いていること。
- ・危機感が薄れていたが、映像を見て涙が出そうになった。
- ・津波から逃げている映像が生々しく、これが現実かと思った。
- ・映像を見て、「生きてて良かった」の意味が分かりました。
- ・しっかり行動できるようにしたい。
- ・高校生として地域に貢献すべきと思った。
- ・自分自身でできる対策・方法を考えたい。
- ・何が必要か考えておくべき。
- ・集団行動が必要。
- ・生徒が揃わないのはとてもかわいそうだった。
- ・常に標高や避難場所を気にしておく。
- ・自宅の標高を調べる。



4 講師 佐藤忠司先生にメッセージを

- ・とてもわかりやすく丁寧な講演をありがとうございます。
- ・映像や体験談をありがとうございました。
- ・講演を聞いて良かったです。
- ・まだまだ東北以外の学校に教えてあげてください。
- ・詳しく知ることから逃げていた。
- ・本当に良い経験になりました。
- ・これからも若い人に伝え続けてください。
- ・実体験の話は興味深く真剣に聞き、時間を忘れてしまいました。
- ・貴重なお話ありがとうございました。深く考えさせられ、自分のためにもなりました。
- ・つらい出来事を話してくださり、ありがとうございました。
- ・震災がきても生き残ります。
- ・生きのびることの大切さが分かりました。
- ・この話を活かしてこれから行動したい。
- ・生きていることに感謝して生活したい。
- ・津波や地震への意識が変わった。
- ・7時間かけて来てくださり、ありがとうございました。
- ・すごく心のこもった講演ありがとうございました。



避難訓練 「校舎以外からの避難経路も」



多数のご参加をいただきました

③ 研究協議について

防災教育講演会の終了後、パソコン教室にて、佐藤忠司先生を囲んで、防災教育に関する研究協議をおこないました。質問に対する応答、意見、情報提供などが活発に交わされました。

<参考>茅ヶ崎西浜高校の防災教育（本校ホームページより）

<http://www.chigasakinishihama-h.pen-kanagawa.ed.jp/pdf/saijikiH251004.pdf>

◆安全が確認されない場合は、生徒を下校させない。

※「学校防災マニュアル作成の手引き（平成24年3月文部科学省）」を参考
引き渡しルール

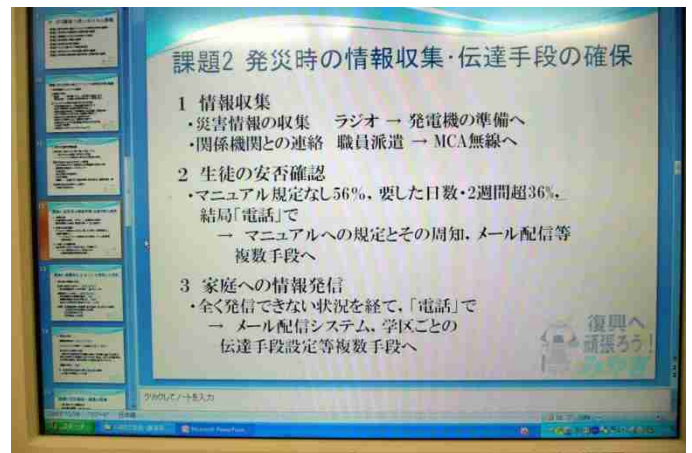
- ・ [学校内震度5弱以上] 保護者が引き取りに来るまで学校に待機させる。この場合、時間がかかっても保護者が引き取りに来るまでは、生徒を学校で保護しておく。
- ・ 引渡しのルールは原則、上記によるが、被害の状況、火災の発生状況、公共交通機関の復旧状況、学校周辺の交通事情などを十分に検討し、総合的に判断して生徒の保護の継続あるいは下校を決定する。
- ・ 下校については、安全が確認された後行うものとし、保護者への引き渡しの方法や職員の引率での下校にあたってのグループの編成・下校ルートなどを、あらかじめ生徒・保護者と確認しておく。
- ・ 公共交通機関の運行中止により保護者が帰宅できないことを十分配慮する。

研究協議の参加者

茅ヶ崎西浜高校教職員、佐藤忠司講師、神奈川県情報防災課、茅ヶ崎市防災対策課、「ひらつか防災まちづくりの会」（本校防災教育協力団体）、県立高校管理職、茅ヶ崎西浜高校保護者



研究協議の会場（パソコン教室）



説明資料の一部

◆佐藤忠司講師より

- ・ 「津波警報」が出ている間は、生徒を学校に待機させる。
- ・ 生徒に、住んでいる場所の標高・位置を「地理」の授業などで教えてほしい。
- ・ 多少は孤立することを、学校側は考えに入れておく。
- ・ 判断がつくまでは、生徒を留めておいた方がよい。
- ・ 各生徒について、緊急時の連絡先、引き渡し方法を記したカードを用意。
- ・ 避難確認カード（誰に引き渡したかの確認用カード）が大切である。

- ・避難所では、ホワイトボードが役に立った。
セロハンテープ、メモ用紙、マグネットが有効。名票を常時貼っておいた。
マーカーペンや油性マジックを使うと大変になるので、注意する。
- ・ランタンや乾電池の変換器（単3→単1など）が役に立った。
- ・電池の備蓄は、すべてアルカリ電池にした方が長持ちして便利である。

◆茅ヶ崎西浜高校は「津波発生時の一時退避場所に係る協定」を市や自治会と締結

- ・「津波警報」発生時には、生徒は北館の3階と4階に避難
- ・ 〃 地域住民及び帰宅困難者は本館及び南館の3階と4階に避難
- ・「津波警報」が解除されたら、高校関係者以外は在宅避難もしくは小中学校へ。
茅ヶ崎市担当者が指示・誘導する。

※高校は一時的な避難所で、市内の小中学校 32 校が避難所になっている。

※津波予想が、1 m以上で「警報」、3 m以上で「大津波警報」になる。

◆出された主な意見

- ・東日本大震災では、携帯電話がつながるようになったのは、だいぶ経ってから。
- ・命の大切さをしっかり教えるべきである。
- ・生徒たちには、「どんな場所に今いるか」を常に意識させるべきである。
- ・「地理」の授業で、液状化現象などを扱う必要がある。
- ・家庭科や英語科（英語での情報に対応）でも、防災教育が必要である。
- ・「地学」の授業で地震・防災をどう扱うかという取組みが進められている。

佐藤忠司先生には、宮城県気仙沼高校の進路指導部長として、本校の教職員に対して、
午後には「進路指導講話」をしていただきました。深く感謝申し上げます。

